

ベトナムに夫婦で出かけて来ました。

そこには、フランス文化の名残と東洋文化が

融合した姿がありました。

ベトナム・ハノイで気まま旅



田中 成美 著

プロローグ

ひょんなことで、夫婦でベトナムに行くことになった。

「どうしてベトナムですか？」と幾度か尋ねられたが、思い当たる理由は二つある。一つは、ここ20年来、株投資をやっている私だが、5年位前までは専ら中国株だけをやっていた。

その株投資も、ある日ある図書館で邱永漢（直木賞作家、実業家、投資家）の本を手にとったことがきっかけであった。本の題名は今でも鮮明に覚えている。「メシの食える経済学」だった。その本は本当に面白く、深く、経済や社会に対して開眼的な書であった。

そして大ファンとなり、邱永漢の本は全て読んだのだが、ある本の中に「中国の次に成長してくるのはベトナムだ。ベトナム民族は古来より頭が良く、働き者だから」という様な箇所があり、それが妙に頭に残っていたのだった。「そんなベトナムを一度見てみたい」との思いが、心の片隅にあったのだ。

また、ずっと以前に、東京のある大学教授が企画した「スタディツアー」でラオスを訪問したことがある。そのツアーで、ベトナム国境沿いの村を訪問した時があった。その大学教授（ラオス出身）が、村民の皆さんにお話をされた時に、「ベトナムを見習いなさい、教育が大事だと知っているし、よく働く。子供は家の手伝いをさせないで、学校に行かせなさい」と、熱っぽく語っておられた。

そんな2つの出来事が心に残っていて、旅行の話が持ち上がった時、「ベトナムに行こう」となったのである。

ベトナムも成長が続き、開発も進み、リゾートとしても十分な魅力を持つようになって

ている。高級ホテルでのリゾートが大好きなハズバンドも、すぐ同意してくれた。
長年温めてきた興味が、旅として実現することとなった。

こういうところが人生は面白い！



①ベトナムはなかなか英語が通じない

福岡空港から飛び立ったベトナム航空の飛行機は、緑濃い首都ハノイの上空で着陸態勢に入っていた。直行便で4時間半という近さであり、時差も2時間しかないというのは、本当にありがたい。

どんどん高度を下げていく飛行機から、緑濃い、豊かな田園地帯がどこまでも広がっているのがクローズアップされてくる。

「何と池や湖が多いのだろう！」と思わず見とれてしまっていた。それもそのはず、ハノイは悠々と広がる紅河デルタ地帯の上にあるのである。

飛行機がますます高度を落とすにつれて、市の様子がやや詳しく浮かび上がってき

た。大きな湖は市の中心部にある「ホアンキエム湖」で、私達のホテルはあの辺りだろうかと思ったりして、期待感はいよいよ高まっていった。

入国手続きを終え、ゲートを出るとホテルが手配してくれたタクシーの運転手が待っていてくれた。予定時間よりも2時間近く遅れたのでちょっと気の毒だったが、にこやかに出迎えてくれてホッとした。

英語で「ちょっと両替してきますから、待っていてください」と言ったが、全く通じない。ジェスチャーを交えたら何とか伝わったようだ。それで旦那様を待たせて、両替所に走って行った。が、標識がベトナム語と英語が入り混じっているの、両替所の窓口がどこにあるのなかなか見つけられない。

そこで、近くに立っていた若いベトナム女性に、「すみません、両替所はどこですか？」と英語で尋ねた。そしたら、流暢な英語で答えが返ってきた。

「あなた、両替したいんですか？私も両替できますよ。いくら両替されますか？」
私は、「うーん、1万円ぐらいかな・・・」と答えた。

するとその女性は魅力的な笑顔で、「1万円でしたら、私だったら200万ドンあげますよ！」と言うのだ。まだ着いたばかりで、ベトナムドンの計算ができない私だったが、長年の海外旅行の経験からくる勘が、「この話は乗らないほうがいい」と伝えてきたので、「いいえ、私はやっぱり両替所に行きます」と言った。

そしたら、あっさりと諦め「両替所はあそこよ」と教えてくれた。すれてないというか、可笑しいというか、これがベトナム人の特性かと安心もした。

ちなみに、両替所では1万円は206万ドンとなった。あの女性は、約6万ドン（約240円）を余計に稼ごうとしたのか。円に直してみると僅かな額だが、やはり

ぼられたくはない。

もしも、私ではなくハズバンドだったら、若い美女に目がくらみ、安々と両替を受け入れていたかも。(笑)



湖が多いハノイ市



紅河に広がるデルタ地帯にあるハノイ市

② ホテルの予約

今回のベトナム旅行のホテル手配は、〇〇〇〇.com というサイトを通して予約をした。およそ2か月前には準備を始めたのだが、最初の2泊は観光し易いように旧市街地の中心部のホテル「ペリドット ホテル」を押さえた。その数日後、ホテルからメールが来て、「御予約、ありがとうございます。当ホテルにもツアーデスクがごございますので、何かございましたら御遠慮なくお問い合わせ下さいませ」と、立派な美しい英文で書かれてあった。

今回の旅の1番の目的は「ハロン湾1泊クルーズ」だったので、さっそく返信してクルーズの情報を送ってくれるよう頼んだ。すぐ返事が来て、それから幾度かメール

のやり取りをして、最終的にどのクルーズ船にするかを決めた。ここまでは普通のこと
とで、今までも何度も経験のある事だった。

しかし、次のメールで状況が一変した！

「もしもあなたが、〇〇〇〇.com の予約をキャンセルして、ホテルに直接予約いた
だきますと、同じ値段で、①空港でのピックアップ ②ホテルのワンランク上のスー
ペリアルームの部屋 ③同じ船の、同じ内容の一泊クルーズを御用意できます。」と
オファーしてきたのだ。

これまで数多くの国に出かけて、ホテルから何から自分で手配してきたことは数多
いが、こんなオファーの提案を受けたのは初めてだった。

それで、再度予約内容を検討してみた。

「4 つ星ホテルのスーパーア ルーム 2 泊、一泊のクルーズ船のお部屋も 4. 5
星クラスでかなり良い、おまけに空港でのピックアップがあれば本当に楽しんだ、
しかも 2 人分の料金全て込みで、\$ 5 7 5 (約 64,000 円) と、かなりお得であ
る。」ということで、さっそく〇〇〇〇.com をキャンセルして、そのオファーを
予約した。もしも、この内容で日本の旅行会社に頼むなら、2~3 万円は高くなる
だろう。プチ ラッキー感がして嬉しかった。

ちなみに、ハロン湾から帰ってからの一泊は、5 つ星の「インターコンチネンタ
ル ウェストレイク ホテル」に予約していた。これは予約時にカード決済をし
ないといけないし、キャンセルしても 1 銭も帰らないシステムになっている。ホ
テルの担当スタッフはそれを知っているのだろう。その日の宿泊については、最
初からノータッチであった。(笑)



家庭的なサービスで、心地よい滞在が
できた peridot Hotel



いつも一生懸命で、よく働くスタッフ達

③ベトナム人はがんばり屋さんが多い

ホテルが手配したピックアップの車は、無事にホテルに着いた。ホテルの受付ではメールで特別なオファーをしてくれたペリドット ホテルのコンシェルジェ、ジュリアも私達の到着を待っていた。メール交換をしていたので、どこか懐かしい感じが弾んだ。あまりに完璧できれいな英語を話すので、「どこで英語を勉強したの？」と尋ねてみた。すると、「1年半ぐらい自分で勉強しました」との答えであった。仕事でどうしても必要なので、頑張ったという。私も英語を教えているが、たった1年半でここまで上達した生徒は知らない。よほどの努力をしたのだと、感心してしまった。

しかし、旅が進むにつれ、このような努力家は数多いのが分かってきた。

例えば、湖畔にある小さなレストランで昼食をとったことがあった。最初は片言の英語しか通じないウエイトレスで苦労したが、後で店長が顔を出して驚いた。30代半

ばと思われるその店長はネイティブ並みの英語を使いこなすのだ。

いつものように、どこで学んだかを尋ねると、「自分で勉強しました。この辺りは外国人もけっこうお住まいですし、このレストランのお客様も外国人が多いので、英語はどうしても必要なんです。」とのことだった。

何というバイタリティかと感心してしまう。

また、後日オイルマッサージをしに行ったのだが、その若い女性マッサージ師も英語と日本語を使いこなしていた。日本語のほうはまだ充分ではなかったが、彼女も独学らしく、「私は日本に行きたいです。それで日本語を頑張って勉強しています」と、目を輝かせながら言っていた。

きっと、「ジャパン ドリーム」を実現したいのだろう。

これだけのバイタリティと語学脳があれば、きっと何かの形でドリームを実現できることだろう。そう願ってあげたい。GOOD LUCK！



湖畔のレストランで、英語が流暢な店長&、英語はできないがいつもニコニコだったウエイトレスさん。



店長がサービスしてくれたデザート。中には抹茶クリームが入っていた。

④ホアンキエム湖周辺はシクロが最高！

ハノイ滞在2日目は「市内観光」をすることにした。

どの方法が最も良いかをホテルスタッフに相談すると、「シクロが一番ですよ。歩く速度で旧市街を見られますし、どこでも、いつでも好きな所に立ち寄れますよ！気持ち良いですよ！！」と言う。シクロとはフランス語（Cyclo）で、これもフランス統治時代の名残の一つであろう。とにかく、ベトナムの三輪人力車であるシクロ、大人二人は乗せられるようにしてある。

安全性や値段等をホテルスタッフに尋ねて、訪れたい場所を告げ、手配してくれるように頼んだ。すると、そのスタッフは足早にホテルを出て、近くに止まっていたシクロを捕まえ、値段交渉やコースを私達に成り代わって、情熱的にやってくれたのだ。まるで、私達が彼女の友人か何かであるような感じで。

これまでの数か国に及ぶ旅行経験からしても、こんなことは初めてである。だいたいビジネスライクでしか手配してくれない。ここは何かが違う。私たち日本人が、外国人旅行者にはより楽しい日本旅行をして欲しいと願うように、また自分にできることがあれば、喜んではいるような感じである。それはたぶん、愛国心の発露とも言えるのかもしれない。

単一民族国家という点でも日本と似ている。また、多大な犠牲を払ってのフランスからの独立、辛酸極まりないアメリカとの戦争、そして勝利・・・その後のアップダウン激しき情勢・・・民族のそんな経験から培われてきた愛国心かもしれない。

また、思えば既に予約していたのをキャンセルさせてまで、より良いサービスを提供

したいとオファーしてきたジュリアも、どうも自分の業績を上げたいとの思いばかりではなく、「このお客様により良い滞在をさせたい」と本気で思ったのではないだろうか。そう思うと全ての謎が解ける感じがした。

さて、重い私達二人を乗せたシクロは旧市街をゆっくり歩くスピードで走り出した。運転しているのは 57 歳のおじさんだ。(片言の英語で伝えてくれた) しばらくするとおじさんの呼吸が荒くなり、(重いんだろうな) と、ちょっと気の毒になった。

(笑)

シクロは先ず、旧市街のマーケット地区に私達を運んで行った。そよ風を頬に受けながらのシクロは、本当に気持ち良かった。

観光のためもあってか、政府の歴史遺産として保護・保存されている職人の町、マーケットの町の旧市街の風景がシクロに沿って流れて行く。

かつてタンロン城がベトナムの首都であった 1010 年から 1804 年まで、ここは城下町だったのだ。現在ではタンロン城はハノイ市西方にある世界遺産遺跡となっている。金物屋が並ぶ金物通り、お茶屋が並ぶお茶通り、と風景が移っていく。

その時、我が家のシェフであるハズバンドの御要望もあって、私達を香辛料のお店に連れて行ってもらった。袋一杯の「八角」を安く手に入れた旦那さまはご満足の様子だった。

ちなみに、ちょっと汚く見えるこの辺りの食堂は政府が特別営業許可を与えていて、夜 2 時過ぎまで地元住民で賑わっているそうだ。しかし、私はちょっと行く気にはなれなかった。(笑)



旧市街のお店のようす



快適だったシクロ

⑤便利だった配車サービス GRAB

シクロは2時間の予定で貸し切ったが、1時間\$30であった。現地の感覚からすると高いが、旅行者専用には保存・保護されている乗り物でもあり、運転者の重労働を考えると妥当な値段であると思った。

マーケット、ホアンキエム湖周辺、大聖堂、オペラハウスと回ってもらい、最後は歴史博物館で運転手さんと別れた。

博物館を見た後、疲れていたのでホテルに帰ることになり、ここで準備してきた配車サービス GRAB を使い始めることにした。

日本ではまだなじみの薄い「配車サービス」だが、世界レベルではかなり普及している。そのせいでタクシー業界がどこも苦戦しているが、これも世の流れ、時代の波であり、抗ってもどうしようもないと思う。また、新テクノロジーが台頭すると、消え行く仕事もあるが、新しく生まれる仕事もたくさんあり、新しい雇用も多く生れていくだろう。いずれにせよ、旅行者からすれば、これほど便利で助かる乗り物は他にない。

い、といった感じである。

3年前にアメリカのアトランタに行った時に利用したことがあった。アメリカではUBERという会社だったが、その便利さ、安全さ、安さにすっかり魅了されたのだった。残念ながら日本では東京の一部だけで試験的に解禁されているだけなので、熊本ではまったく使えない。

しかし、日本も時代の波には勝てないのだろう、タクシーの配車サービスを試験的に始めたようである。それは徐々に民間の配車サービスに取って代わられることだろう。

東南アジアでは既に普及しており、あの巨大な会社UBERを、2018年にシンガポールを拠点とするGRABが買い取ったそうだから凄い。今は、東南アジアの8ヵ国・336都市で展開しているそうで、いかに需要が大きい事業かが窺い知れる。

さて、この「配車サービス」とはいったいどのようなものか、ここで少しご紹介しよう。

通常のタクシーと違ってGrabは、車を手配した時点でルートと料金が決まる。だから海外ではつきものの料金交渉をする必要がない。わざと遠回りされたり、ぼったくられたり心配もないのである。

また、アプリで実際に通ったルートも記録されるので、どこかに連れ去られる事件に巻き込まれる心配もまずないと言ってよい。もし何かあったら「緊急ボタン」を押してGrabに報告することができるし、ドライバーの評価も下がるので、そういった点でも犯罪やトラブルを抑制できていると思う。

というわけで、歴史資料館を出た二人は、お腹のほうぐすいてきたので、旧市街に

あるお気に入りのレストランに行くことにした。それで、さっそく GRAB のアプリを起動した。言うまでもないが、この配車サービスはスマホが WiFi に繋がっていないと利用できない。ハノイは日本より WiFi が普及しているが、まだ電波が弱いというか、繋がらないことが多かった。

そこで活躍したのが、「Global WiFi」であった。幸運かどうか分からないが、私の持ち株の一つがその「Global WiFi」をやっている会社で、その会社の株主優待券の WiFi 無料券をたくさん持っていたのである。

それで、出国前に手続きをしていた無料範囲内の携帯国際ルーターを、福岡空港で受け取って来て、それを現地で使ったわけである。

おかげで、どこでもいつでも WiFi を使え、GRAB も何の支障もなく呼ぶことができた。

GRAB で車を予約すると、スマホの画面でその車が今どこを走っているのかも見えるから、それも本当に便利で感心する。二人で画面を見つめ「あと 1 分・・・あ、来た！」と言って、車に近寄る。運転手のスマホに私の名前があるのを確認してから乗り込むと、後は示されたルート通りに走るから安心だ。

歴史資料館から約 20 分でホテルに着いた。

支払いは既に登録してあるクレジットカード決済なので、ただ「バーイ」と言って車を降りるだけなのだ。

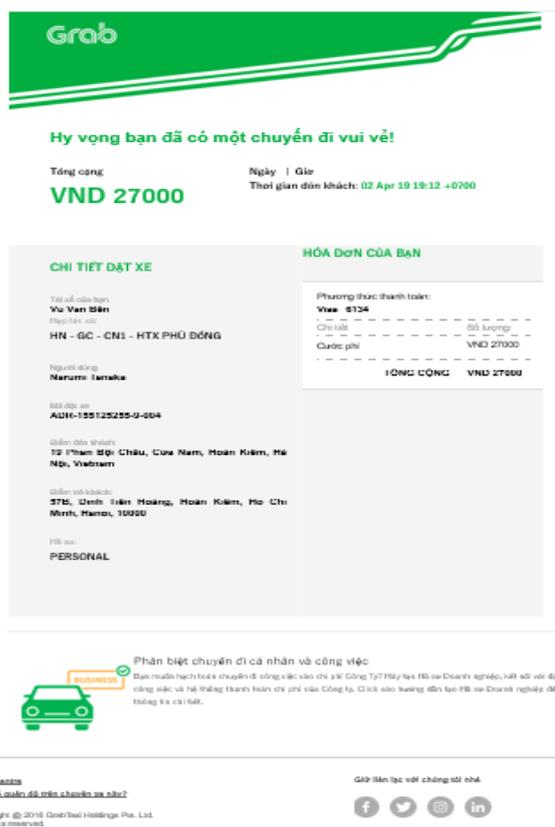
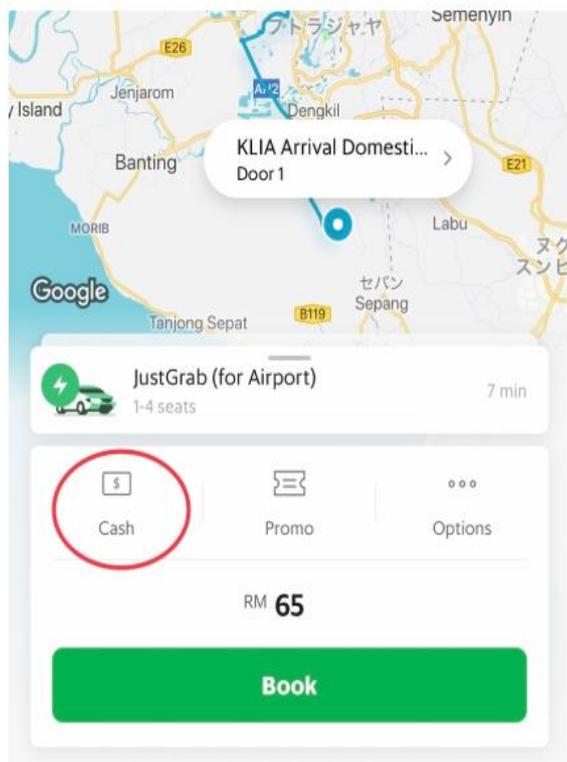
そして数分後、「運転手や車の評価をしてください」とのメールが来た。これをしないと乗客としての私自身の★の数が減るので、なるべく早くするのである。

まず、運転手はとても上手で良かったので、5★をあげた。車は韓国のヒュンダイで

悪くなかったから 4★、車内の清掃は 3★かなー、・・・という具合に評価をするのも面白い。

また、評価をしてしばらくすると、eレシートが送られてくる。利用した運転手の名前、車種、時間、乗った日付、場所、代金、ルートも全て掲載されているのであるから、これもまた感心してしまう。その時の運賃は日本円で 100 円位と本当に安かったのだが、実際は初回無料サービスで 0 円となっていた。こういうサービスも人気の秘訣だろうか。

この GRAB を何度も利用したおかげで、本当に安心して、低価格で色々な場所に行けた私達であった。



⑥ハロン湾クルーズ 第1話

ハノイに着いて3日目、予定通り今日から1泊でハロン湾クルーズに出かけることとなった。先に述べたホテル側の手配で、乗船所までの4時間余りのバスも含め、ハノイに帰って来るまでの全てが手配されているツアーなので、何もしなくてよく、久しぶりに楽ちんであった。

ここでハロン湾の紹介をしよう。

ハロン湾は1500 km²という広大な海域に、大小1600ほどの岩が連なる独特の景観で有名である。「海の桂林」とも呼ばれる。どちらも海底が隆起してできたカルスト地形だが、ハロン湾は隆起した大地がまた海に沈んでしまったため、岩山だけが海面から顔を出しているのだそうだ。1994年に世界遺産に登録されている。

ハノイを出て約4時間後、乗船所に到着した。

バスから降りてクルーズ船ごとの待合所に行って、しばらく待つこととなった。待っている時間に、同じ船に乗る乗客達をぼんやり眺めていた・・・アジア系、ヨーロッパ系、中東系、本当に様々な人種、様々な言語が飛び交っている。不思議なことに、同じ船に乗る日本人は私達だけのようだ。たぶん、日本人は、ハロン湾は日帰りクルーズが組み込まれたツアーを取る人達が主流だからだろう。

あれこれ思っていると、英語のアナウンスが流れた。

「アテネクルーズの皆さま、乗船くださいませ」

そう、私達の船の名前は「アテネ号」なのだ。

まずボートに乗ってアテネ号まで向かった。多種多様の国籍の人達を乗せたボートの上は、多種多様の言語が飛び交っている。老若の夫婦が多いが、インド系男性の二

人連れ、韓国中年女性の4人グループ、若い白人女性の一人旅等々。ただ、アテネ号での1泊2日に期待が膨らみ、笑顔がこぼれ落ちているのは共通している。もちろん私たち夫婦も例外ではなかった。



思い出多い「アテネ号」



お部屋も広かった

⑥ハロン湾クルーズ 第2話

ホテルの5つ星並みのデラックスな船室に満足した私達は、部屋についているデッキで静寂の海を眺めていた。ヒスイ色の海に浮かぶ無数の島々が、自然の造形ショーを見せるが如く、静かに流れていた。

すると、その静寂を破るように船内放送が流れた。

「ただ今からシーカヤックに行きます。お疲れの場合は屋上のデッキで休まれてもかまいません。また、手漕ぎの小舟をだしますので、それに乗って目的地のフィッシング ビレッジに行くこともできます」とのことであった。

こういう風に、常にチョイスを与えるのも外国的で気に入った。日本だったら、多少の疲れは我慢してでも、皆に付いて行かなくては、という雰囲気があるものだ。

私達夫婦にとっては、このシーカヤックも今度の旅の最大目的のひとつだったので、喜んで参加した。これまでも、バリ島やパラオでのカヤック経験があり、二人とも気に入っているエコ・スポーツである。

さっそく二人乗りのカヌーに乗り込むと、久しぶりなのでなかなか前に進まなかった。でも、さすが外国だ、コーチ等の助っ人は誰もいず、自力で目的地のフィッシング ビレッジに漕いで行くしかないのである。

なかなか本格的なシーカヤックだが、幸いにもハズバンドがなかなか感が良く、カヌーの後部席の法から、「はい右、はい左、あー、強すぎる・・・」とか言って、指図してくれたので何とか目的地まで漕いで行くことができた。かかった時間は1時間を少し過ぎていたかもしれない。

私達夫婦が最後かな、と思いきや、最後尾はインド人の若い男性二人連れであった。うまく方向が取れなかったらしい。

1時間もシーカヤックをすると、本当にクタクタになる。おかげで、その夜にあった「イカ釣り」はパスしてしまうことになったが、今思うともったいないことをした。

(笑)



シーカヤックのようす



デッキでくつろいだひと時

エピローグ

ハロン湾クルーズからハノイ市に帰った後、私達は 5 つ星ホテルの「インターコンチネンタル ウェスト レーク」に宿泊した。確かに豪華なホテルだったが、私個人としては、人の近さから、4 つ星のペリドット ホテルのほうが気に入っていた。

ハズバンドはもちろん、インターコンチネンタル ホテルのほうがお気に召したようで、写真を何枚も撮っておられた。

インターコンチネンタル ホテルには日本人スタッフがフロントに配置してあった。その日本人スタッフが、「このところ、タクシーにグルグルと連れ回られて、ぼったくられるケースが増えております。当ホテルでは、このタクシーを推薦しております。充分お気を付けくださいませ」と言ったので、私は「私達はいつも GRAB を使っていますが・・・」と言うと、そのスタッフは意外な感じで、「さようでございますか。GRAB はいつも安全でございます。」と言ったのである。

きっと彼女はプライベートでは GRAB を使っているに違いないと思った。(笑)

ベトナムから帰ってひと月が過ぎようとしている。今回の旅を振り返ってみて、やはり「ハロン湾 1 泊クルーズ」は本当に素晴らしかったと思う。

特に、誰もいないデッキで聞いた紺碧の海を吹き渡る風の声、早朝の部屋のデッキで目にした水墨画そのものの、薄墨色にけぶる島々の重なりと静寂の世界・・・それは極上の世界という言葉に相応しかった。

シーカヤックの他に、デッキ上でのベトナム料理教室、早朝の太極拳、洞窟探検、おいしい食事、フレンドリーな船員スタッフ達、ハンサムで英語がうまく、気が利いて

いるマネジャー、インドやイランからの乗客の方達とお話したこと等、懐かしく思い出される。

突然、「ベトナム戦争」、「北爆」、「ベトちゃん ドクちゃん」等の言葉が脳裏に浮かぶ。あんなに穏やかな平和な海や田園に爆弾の雨が降り、あんなに素朴で温かい民族が、地下壕を彫りめぐらし、ゲリラ戦でアメリカに勝利した、そんな時代が本当にあったのだろうかと思う様な、今日の北ベトナムでありハノイであった。

訪れた「捕虜収容所」では、フランスからの独立運動に身を投じた、多くのベトナム政治犯を捉え、ひどい拷問を与え、そのせいで多くの捕虜が命を落とした事実が伝えられていた。またその後、その収容所ではベトナム戦争時のアメリカ軍人の捕虜を収容していたそうだ。

そんな悲惨極まりない過去を踏まえ、乗り越え、アメリカと北朝鮮の首脳会談をホストする国にまで変貌・発展したのは素晴らしいと思う。実際、トランプ大統領が来た時は、星条旗を振って大歓迎をしていた。

きっと日本のように過去は過去として、そこから学び、ひたすら未来をみつめ努力しているに違いないと思う。

同じ国にまた行きたいとはあまり思わない私であるが、ベトナムは機会があれば、もう一度じっくりと訪れたいと思う。今度は奥深い山岳地帯、そしてハロン湾には大きな島があるので、そこで宿泊し現世を忘れたい・・・そんな夢が膨らむ、魅力溢れる国であった。

2019年（令和元年）5月5日

田中成美 書